

オープンアクセスはより多くの引用をもたらす (Jeffrey M. Perkel)

Perkel, Jeffrey M. Open access brings more citations. *The Scientist*, 16th May 2006.

<<http://www.the-scientist.com/news/display/23448/>>

PNAS 論文の分析は、オープンアクセス論文が購読ベースの論文よりも大幅に引用されることを示す。

オープンアクセス雑誌 *PLoS Biology* に今週発表された研究¹⁾によると、オープンアクセス²⁾論文は、購読ベースの論文に比べて多く引用されている。けれども、これらの知見だけでは、多くの著者がオープンアクセス出版を検討するように説得することにならないかもしれないと専門家は述べた。

この報告は「多くの人がそうかもしれないと疑問に思っていたことを裏付けているととりがちだ」と全米科学アカデミー (National Academy of Science) の事務局長であり、*Proceedings of the National Academy of Science (PNAS)*³⁾の発行者である Kenneth R. Fulton は述べた。だが、これらの知見がどの程度広く適用できるのか、そしてオープンアクセス出版を検討するように説得するかどうかともわからないと彼は付け加えた。例えば、先週、出版研究コンソーシアム (Publishing Research Consortium) から公表された調査⁴⁾は、論文へのアクセスが研究者にとって大した問題ではないことを示している。具体的にいうとその調査では、科学者が研究の生産性の改善が可能性な方法として列挙した 16 の事項のうち 1 文献へのアクセスの増大を 2 番目にランク付けしていることがわかった。

既往の調査⁵⁾はオープンアクセスが引用インパクト (citation impact) に与える影響を検討した。最新の研究は、2004 年 6 月 8 日に論文単位のオープンアクセス出版の選択肢 (1 論文当たり 750 ドルから 1,000 ドルかかる) を提供し始めた *PNAS* の論文に重点を絞り込んだ。研究の著者 Gunther Eysenbach⁶⁾はオープンアクセス[雑誌]の *Journal of Medical Internet Research*⁷⁾の編集者兼発行者であり、2004 年の 6 月から 12 月にかけて出版された 1,492 論文に分析を限定した。そのうち 212 論文がオープンアクセスであった。彼は、出版後 0 ヶ月から 6 ヶ月後、出版後 4 ヶ月から 10 ヶ月後、そしてさらに出版後 10 ヶ月から 16 ヶ月後の生の引用データを測定した。

Eysenbach が生のデータを検討し、そしてまた著者の人数、過去の生産性、連絡先の著者の国および投稿の経路 (submission track) のような潜在的な交絡因子 (confounders) を考慮したときに、オープンアクセス論文は、出版後 4 ヶ月から 10 ヶ月後と 10 ヶ月から 16 ヶ月後の両方[の期間]で大幅に引用されていた。例えば、交絡因子を調整した後では、出版後 10 ヶ月から 16 ヶ月後に少なくとも 1 回引用された非オープンアクセス論文に比べて、オープンアクセス論文はほぼ 3 倍以上引用される可能性が高かった。著者がインターネットに論文を無料で掲載するセルフアーカイビング (self-archiving) も引用を増やすように思われる。「公開度のレベル (level of

openness) と引用のレベルにははっきりした相関関係」があったと Eysenbach は書いた。

PNAS では著者がオープンアクセス出版を選択する割合は低いが比較的安定していると Fulton は述べた。「この論文が一度広まると、たぶん私たちはオープンアクセス投稿の急上昇に遭うだろう」と彼は述べた。「本当にはっきりしたことはわからない。」

2004年9月の *PNAS* に細胞内作用輸送 (intracellular action-based transport) についての非オープンアクセス論文⁸⁾を出版したカリフォルニア大学アーバイン校の研究者 Steven Gross は考えを変えそうな著者の一人である。これらの結果を踏まえると「私はオープンアクセスで出版することにもっと乗り気である。」と彼は電子メールで述べた。

「その論文についての私の感想は、それはうれしいもので、一歩前進である。」と Nature Publishing Group⁹⁾ (NPG) のブランド・マーケティング及びコンテンツ・ライセンシング部長 David Hoole は *The Scientist* 誌に語った。だが、Hoole は、本論文が多くの著者にオープンアクセスを追求する気を起こさせるとは思えない、というのはどこに出版するかを決定する場合に、著者は引用のより大きな可能性よりも助成によって課せられる条件にずっと影響されるからだと述べた。Nature は現在、オープンアクセス・モデルの一つに転換する計画がないが、「私たちはいつもそれなりの選択肢を検討している¹⁰⁾」と Hoole は述べた。NPG の雑誌の一部はオープンアクセスか、*PNAS* と同種のオープンアクセス・料金ベースの混合型のアプローチを提供する。

Hoole は本研究の潜在的な欠陥の一つに注意した。すなわち、オープンアクセス論文が一般に非オープンアクセス論文よりももっと重要であるという潜在的な交絡因子を回避するために、Eysenbach は著者にその論文の相対的な緊急性、重要性および質について自己評価 (self-rate) するように依頼した。「このような環境における自己評価は、申し立ての重視に基づいているので方法論として弱いように思われる」と彼は述べた。Eysenbach は、査読者 (peer reviewer) の査定にアクセスしようと試みたが、それは守秘義務の懸念があることを引用して、雑誌は提供しようとはしなかったと述べた。したがって「唯一の選択肢は実際に著者に尋ねることである。」

Eysenbach は、データセットを6ヶ月間隔で観察し続ける計画があると *The Scientist* 誌に語り、最新のデータ¹¹⁾は出版後16ヶ月から22ヶ月の間でさらにオープンアクセスの優位性が広がることを示していると注意した。

本論文へのリンク

1) G. Eysenbach, "Citation advantage of open access articles," *PLoS Biology*, May 16, 2006.

<http://www.plosbiology.org>

2) S. Pincock, "Will open access work?" *The Scientist*, Oct. 11, 2005.

<http://www.the-scientist.com/news/20051011/02/>

- 3) Proceedings of the National Academies of Science
<http://www.pnas.org>
- 4) I. Rowlands and R. Olivieri, "Overcoming the barriers to research productivity: A case study in immunology and microbiology," *Publishing Research Consortium*.
<http://www.publishingresearch.org.uk/prcweb/PRCWeb.nsf/0/3DF67165EB1FCA078025716B0048ADB8!opendocument>
- 5) "Effect of open access on citation impact: A bibliography of studies," Open Citation Project.
<http://opcit.eprints.org/oacitation-biblio.html>
- 6) Gunther Eysenbach
<http://yi.com/home/EysenbachGunther/>
- 7) The Journal of Medical Internet Research
<http://www.jmir.org>
- 8) J. Snider et al., "Intracellular actin-based transport: How far you go depends on how often you switch," *PNAS*, September 7, 2004. PM_ID 15331778
- 9) Nature Publishing Group
<http://www.nature.com/index.html>
- 10) T. Agres, "Publishers, societies oppose 'public access' bill," *The Scientist*, May 11, 2006.
<http://www.the-scientist.com/news/display/23426/>
- 11) G. Eysenbach, "The open access advantage," *Journal of Medical Internet Research*, May 15, 2006.
<http://www.jmir.org/2006/2/e8/>